

国立国語研究所学術情報リポジトリ

System of the negative expressions in Tokyo dialect in the early years of Meiji period

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飛田, 良文, HIDA, Yoshifumi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001775

明治初期東京語の否定表現体系

——『安愚楽鍋』における
「ない」「ねえ」「ぬ」「ん」の用法——

飛 田 良 文

- 1 はじめに
- 2 存在・指定・状態の否定表現体系（形容詞の場合）
 - 2-1 形容詞「ない」「ねえ」の実態
 - 2-2 形容詞「ない」「ねえ」の否定表現体系
- 3 動作の否定表現体系（助動詞の場合）
 - 3-1 助動詞「ない」「ねえ」の実態
 - 3-2 助動詞「ない」「ねえ」の否定表現体系
 - 3-3 助動詞「ぬ」「ん」の実態
 - 3-4 助動詞「ぬ」「ん」の否定表現体系
 - 3-5 助動詞「ない」「ねえ」と「ぬ」「ん」との関係
- 4 まとめ

1. はじめに

明治初期東京語の否定表現には、形容詞「ない」と助動詞「ない」「ぬ」に代表される否定語が使われている。そして、形容詞の「ない」は、たとえば、「手本がない（ある）」「清潔でない（ある）」「寒くない（寒い）」のように、存在・指定・状態を否定し、助動詞の「ない」「ぬ」は、たとえば、「行かない（行く）」「帰らぬ（帰る）」のように動作を否定する。しかも、「ない」は終止形・連体形の連母音が長音化して「ねえ」となり、「ぬ」も母音が無声化して「ん」となり、「ない」「ぬ」と並行して使用されている。そこで、存在・指定・状態の否定表現体系と動作の否定表現体系はどのようなものであったか、終止形・連体形の「ない」と「ねえ」、「ぬ」と「ん」の用法を手がかりとして、その実態を明らかにしてみたいと思う。いいかえれば、第一に、存在・指

定・状態の否定表現は、「ない」と「ねえ」がどのように使い分けられていたか、第二に、動作の否定表現は「ない」と「ねえ」がどのように使い分けられ、また、「ぬ」と「ん」はどのように使い分けられていたか、さらに、「ない・ねえ」と「ぬ・ん」とはどのような関係にあったかを明らかにしたいと思う。そして、終止形に、また連体形に、二つ以上の否定語が存在しえた理由とその必然性を考えてみたいと思う。

そこで、江戸時代から東京時代への過渡期にあたり、まだ身分意識が残っていた明治初期東京語を反映している仮名垣魯文の『安愚楽鍋』(明治4～5年刊)を資料として、下接語の種類、待遇関係、話し手の身分・職業・性別、活用体系などの観点から、明治初期東京語の否定表現体系の実態を明らかにしてみたいと思う。

『安愚楽鍋』に登場する人物は、身分・職業が武士・職人・商人・遊女など広範囲にわたる点に特色がある。ただ、すべての人物が東京(江戸)生まれとは限らないが、大都市の人口は絶えず流動しているので、全人物を考察の対象とした。主要な登場人物は、およそ次の通りである。

〔男〕

士 40才ぐらい。そうがみ。いずれの旧藩かの公用方。

鄙武士 30才ぐらい。くさたばね。そうがみ。

職人 40才ぐらい。大工か左官らしき風俗。

町人 40才ぐらい。町人てい。いぜん公用方に出入の町人。

商法個 31～32才ぐらい。あきうど。一ミニウトをあらそう商法家。

生文人 31～32才ぐらい。書画会連中。見識は鼻柱とともに高い。

藪医者 あんまあがりのデモ医者。野だいこ九郎。

あくぬけした人物 34～35才。因循家。旧弊家。

新聞好きの男 にわかざんぎりの西洋ごしらえ。

西洋好きの男 34～35才ぐらい。なでつけかそうはつにでもなるところ。

文盲の男 40才ぐらい。居じょくていの男。每晚、軍談の席につめかける常連。

車夫 人力車の車夫。八公。

芝居者 留公。

落語家 22～23才。

野幫間 32～33才。のづ八。のだいこ。口をつぼめて物を言うくせあり。

なまけものの男 24～25才。いちょうに結い、円朝まがい。

〔女〕

娼妓 24～25才。田町あたりへたちのきたる、まじりみせのおいらん。

歌妓 28～29才。町芸者。いぜんは、けんぱんの下地っ子。

茶店女 20才ぐらい。ころ。

それしゃあがり 50才にちかい。ひき。八百屋半兵衛の母と遣手のおよくと仲居の万野と合併したようなしらばけ婆ア。

なお、『安愚楽鍋』の底本には、国立国会図書館蔵本を使用した。

2. 存在・指定・状態の否定表現体系－形容詞の場合－

2-1 形容詞「ない」「ねえ」の実態

『安愚楽鍋』における形容詞の否定語には「ない(なし)」「ねえ」がある。古語形のナシをナイと一括して扱うと、「ない」は未然形(ナク)、連用形(ナカッ・ナク)、終止形(ナイ・ナシ)、連体形(ナイ)、仮定形(ナケレ)の五活用形に活用し、「ねえ」は終止形(ネエ)、連体形(ネエ)の二活用形がある。そこで、(1)ナイ系、(2)ネエ系の順に、活用形別、下接語別、話し手別にみていくことにしよう。用例は原則として男から女、男は士農工商その他の順とする。また、話し手と聞き手の右の数字は使用度数、用例の右の()内は編丁行を示す。

(1) ナイ系

未然形

〈ナクバ〉

〔藪医者¹の独語〕 1

○枕金の小釣をとるかさもなくバ人力車の二挺^{てうと}仕立^{しだて}で吉原へでも(三上21オ6)

連用形

〈ナカッタ〉

〔車夫→同僚〕 1

○きのふほどほねのをれた仕事しごとはなかつたヨ（二下12ウ7）

<ナク>

〔士→町人〕3

○かるいぢいもとんちやくなくぢ座ざのしるしでありさへすれば（二下17ウ1）

○鉄てつ銅どう銭せん入いレれ菱ひしで大きいちひさいわ区く別べつなくな波なみ形かたちがあれば（二下17オ6）

○米こめがあ貴いいとてい餓が死しするものもなくさけがたくとも（二下18オ1）

〔町人→士〕1

○鉄てつよりよ茶ちややるものがなくな文ぶん久きうをを与よればらつりつりりを取とりますが（二下20ウ2）

〔藪医者の独語〕1

○上う戸こでもも下げ戸こでももありきらひなく口くちをかけてかヤやツつたた老らう妓ぎとと合あ併べいして（三上21オ1）

〔新聞好きの男→愚助〕1

○此こ節せつ都と鄙び遠えん近きんとなくな説せ教きやうがおおひひららききにななつつて（三下15ウ4）

<ナクッテ>

〔歌妓→箱廻（みのどん）〕1

○よく〜見るとうしじやアなくなつつてて牛ぎゆう皮ひのおお葉は子こだらうらうじやアないか（二下2ウ4）

〔馬→牛〕1

○うしうしいものをつみはこびこをするすけものじやアなくなつつててひひののくくいものになるものだ
（三上7オ11）

<ナクテ>

〔町人→士〕1

○実じつにに西せい洋やう流りゆうでなくなはは夜よががああけけませせぬ（二下22ウ1）

<ナクッチャア>

〔芝居者→旦那〕1

○人ひと間まのの腹はらががよくなくなつつちちやや人ひとののひひつかつかははれれややせん（三上13ウ8）

終止形

<ナイ>

〔士→町人〕3

○如ごと何なに程ほどののことことももない（二下17ウ7）

○一ひとツつのの器き械かいでで使つかずずるるやうやうににひひららけけるるににへへ疑ぎひひない（二下21オ8）

○それそれにに東とう京きやうばばかりかりちちややない（二下22オ1）

〔野幣間（のづ八）→客〕1

○きのふやけふのことじやないツ（初17オ2）

〔茶店女（ころ）→それしゃあがり（ひき）〕 1

○牛をたべるのひしらうとじやアない（三下10ウ7）

〔それしゃあがり→茶店女〕 2

○牡丹や紅葉へあんまり薬ぢやアない（三下4オ3）

○そんなにわるくおい、でない（三下12オ3）

〈ナイガ〉

〔士→町人〕 1

○僕などが浅智に分ることでないが設令華族方が東京住居になられたとて（二下21オ1）

〔娼妓→茶屋の女中（おはね）〕 1

○わるくいふのじやアないが何処の女郎衆だつて（二上13オ4）

〔それしゃあがり→茶店女（ころ）〕 1

○じまんじやアないが山のねへさん達が（三下9オ8）

〈ナイカラ〉

〔藪医者の独語〕 2

○足元へもおツ付くことでないからい、かげんごまかしをいって（三上18ウ6）

○薬名ばかり間に行ところもないから病家へまねかれて（三上19オ8）

〔それしゃあがり→茶店女（ころ）〕 1

○鳩に豆をやるとしてもないからお客なんぞの（三下2オ5）

〈ナイシ〉

〔あくぬけした男→友先生〕 1

○是はこのあたりにかくれもないし清元へ（二上17オ3）

〈ナイテ〉

〔士→町人〕 1

○よく思へば嵩イのでないテ（二下17オ5）

〔藪医者の独語〕 1

○愚老なぞが医者の真似をしてゐる処でへないテ（三上18ウ8）

〈ナイト〉（「ト」格助詞）

〔藪医者の独語〕 1

○まぐれ当りといふこともないと勸考して（三上18ウ1）

〔文盲の男→安さん〕 1

○それを引語にして養一ツもないとことハツたのが (二下12オ5)

〔歌妓→箱廻 (みのどん)〕 2

○こなうまいものはないと思ふヨ (二下1ウ8)

○けしてそんなわけじやアないとことながら訳かつたから (二下2オ3)

<ナイネエ>

〔歌妓→箱廻〕 1

○ぬれ手であわをつかむやうなことはないねへ (二下7ウ4)

<ナイヨ>

〔娼妓→茶屋の女中 (おはね)〕 1

○人方車があるからびく〜おしでないヨ (二上14オ1)

〔歌妓→箱廻 (みのどん)〕 1

○見守子がおときによべれたやうにざまはないヨ (二下3オ7)

〔それしゃあがり→茶店女 (ころ)〕 1

○美ハすきのくわのといふだんじやアないヨ (三下2ウ2)

<ナシ>

〔娼妓→茶屋の女中 (おはね)〕 1

○トいつてほかにさんだんのしかたもなし年季もきふにやア入れられないし (二上12オ4)

<ナシト> (「ト」格助詞)

〔士→町人〕 1

○開港互市にあらざれば富国強兵の策なしとおもふこゝろになつたぢやテ (二下21ウ8)

<ナシニ>

〔車夫→仲間 (力)〕 1

○いさくさなしにはらて着當をきめて (二下14オ3)

〔歌妓→箱廻 (みのどん)〕 1

○三絃なしにうき世ばなしにでもなると (二下3オ5)

連体形

<ナイ>

〔士→町人〕 1

- 当^あ節^{せつ}とてもあやまちはないはづちやが（二下16ウ6）
 〔新聞好きの男→愚助〕1
- 警^{けい}態^{たい}とも政^{せい}府^ふでおとがめへないものだとおもふやからが（三下15ウ2）
 〔娼^{しょう}妓^ぎ→茶屋の女中（おはね）〕1
- はたらきのない女郎だとあひそをつかされるのへ（二上10オ7）
 〔それしやあがり→茶店女（ころ）〕1
- まだなじみもないお方^{かた}だから（三下2オ7）
 <ナイカ>
 〔士→町人〕1
- ナントたのもしいことてへないか（二下22オ5）
 〔娼^{しょう}妓^ぎ→茶屋の女中（おはね）〕2
- あんまりひけうなひとじやアないか（二上8オ6）
- おはねどんおそくなるとエイ、じやアないか（二上13ウ8）
 〔歌^か妓^ぎ→箱廻（みのどん）〕1
- 牛^{ぎゅう}皮^ひのお菓^か子^しだらうじやアないか（二下2ウ5）
 〔茶店女（ころ）→それしやあがり〕4
- ずいぶんいけるじやアないか（三下1ウ8）
- 脱^{だつ}走^{そう}してしまつたらうじやアないか（三下4ウ5）
- これでおつもりとしようじやアないか（三下13オ5）
- でもモウそういつたからい、じやアないか（三下13オ6）
 〔それしやあがり（ひき）→茶店女〕2
- おまへもひらけないことをいふ子じやアないか（三下2オ2）
- 簡^{かん}口^{くち}で出^であツたらうじやアないか（三下3ウ2）
 <ナイノ>
 〔それしやあがり→茶店女（ころ）〕1
- イエそうでないのサ（三下12オ4）
- 仮定形
 <ナケレバ>
 〔それしやあがり→茶店女（ころ）〕1
- その気でなければ生^{せい}物^{ぶつ}へ食^くへないト（三下3ウ7）
 <ナケリヤア>

〔職人→仲間〕 1

○二分の札がなけりやアびんばうゆるぎもできねへからだで (初23オ 2)

〔新聞好きの男→愚助〕 1

○洋學でなけりやア夜へあけねへヨ (三下14ウ 8)

〔西洋好きの男→客〕 1

○家老のやうな人でなけりやア平人の口へは這入やせんサ (初7オ 4)

〔野帮間 (のづ八)→客〕 1

○なんでも北里のお茶屋の妻若かさもなけりやア山谷堀あたりの (初19オ 6)

〔歌妓→箱廻 (みのどん)〕 1

○おざしきでなけりやアふたん着のまゝ、でいゝから (二下6オ 4)

(2) ネエ系

終止形

〈ネエ〉

〔職人→仲間〕 1

○エ、コウおもしろくもねへ (初22オ 8)

〔文盲の男→安さん〕 1

○うたをよむの候のごん八じやアねへ (二下11オ 6)

〔馬→牛〕 2

○イヤそうでねへ (三上6オ11)

○がうのめつする時へねへ (三上7ウ13)

〈ネエガ〉

〔商法個→商兵衛〕 2

○格別の大商法といふのじやアねへがちつとばかり (三上11ウ 2)

○酔てほらをふくのじやアねへが是までおいらが見込んだ商法に (三上12オ 7)

〔芝居者→旦那〕 1

○そいつのありが対面曾我五郎のせりふじやアねへが花まちえたる今宵のおほせ (三上17ウ 3)

〈ネエカラ〉

〔職人→仲間〕 1

○しかたがねへからつツばへりこんで (初20ウ 7)

〔商法個→商兵衛〕 1

○大商法の洋航しねへじやア大利がねへから去年あめりかの「サンフランシスコ」の
(三上11ウ6)

〔藪医者^{はくしや}の独語^{ひとりごと}〕 1

○後^{のち}を見せる敦盛^{とんせい}のねへからこれの先生^{せんせい}と遣入^{はんにん}こんで (三上20ウ6)

〔あくぬけした男^{おとこ}→友先生^{ともせんせい}〕 1

○弁当^{べんたう}の手あてもねへから大又^{おほまた}をさいそくしたら (二上18オ4)

〔なまけもの男^{おとこ}→半ちゃん^{はんちゃん}〕 1

○おいら一人^{ひとり}ほかへあがるのもおもしろくねへから野面^{のまへ}であがりこんだところが (初
10ウ4)

〈ネエケレド〉

〔職人^{しやくじん}→仲間^{なかま}〕 1

○色気^{いろけ}もそツけもねへけれど附谷^{つくだ}とくりやア (初22ウ4)

〈ネエシ〉

〔職人^{しやくじん}→仲間^{なかま}〕 1

○壱升^{いちしやう}の米^{こめ}の一日^{いちにち}ねへし夜^よがあけてからすがガアと啼^なきやア (初23オ1)

〈ネエゼ〉

〔商法^{しやうぽう}個^こ→商兵衛^{しやうべゑ}〕 1

○地水^{ぢみづ}へ手^てを出す時^{とき}じやアねへぜ (三上10ウ2)

〔文盲^{ぶんまう}の男^{おとこ}→安さん^{やすさん}〕 1

○花潜^{はなひそ}がかうしやくのひき語^{ひきご}にいつたがちげねへぜ (二下10ウ2)

〈ネエト〉 (「ト」格助詞)

〔新聞好き^{しんぶんずき}の男^{おとこ}→愚助^{おろすけ}〕 1

○しかし薄蘭^{うすらん}の誤^ごがねへともいへねへ (三下16オ5)

〔文盲^{ぶんまう}の男^{おとこ}→安さん^{やすさん}〕 2

○だから理^りづめほどこわいものへねへと思^{おも}ふヨ (二下12ウ1)

○くげのおとしだねにさうゐねへとみんながかんしんしたらう (二下9ウ8)

〔娼妓^{しやうき}→茶屋^{ちやゑ}の女中^{にょちゆう} (おはね)〕 1

○たるづけができたからモウようへねへといふふうで (二上8ウ3)

〈ネエト〉 (「ト」接続助詞)

〔野帮間^{のばんげん} (のづ八) →客^{きやく}〕 1

○こんどへあなたとでもおともでねへと見つかりやアどんなめにあふか (初18ウ6)

<ネエヨ>

〔商法個→商兵衛〕 1

○關花^{ひかり}の人物^{にんぶつ}じやアねへヨ (三上12オ6)

〔馬→牛〕 1

○くるまをひく身の上じやアねへヨ (三上6オ12)

〔茶店女(ころ)→それしゃあがり(ひき)〕 1

○ホンニおひきさん^{おひき}の欲^{ほつ}がねへヨ (三下12ウ8)

<ネエワエ>

〔職人→仲間〕 1

○おそれるのじやアねへへトいゝが、りやア (初23ウ4)

連体形

<ネエ>

〔職人→仲間〕 2

○あの勤次^{きんじ}の野郎^{やろう}ほど附合^{つがひ}のねへまぬけハ (初20ウ1)

○南^{なん}京^{きやう}米^{まい}とかての飯^{いひ}ハ喰^くツたことがねへ男^{おとこ}だ (初23オ5)

〔商法個→商兵衛〕 1

○ア、いくちのねへお合^あダ (三上12ウ6)

〔なまけものの男→半ちゃん〕 1

○かけがへのねへ大^{だい}楮^{しゆ}幣^{へい}をとう〜一枚^{まいまい}こすらせられたぜ (初13ウ8)

〔歌妓→箱廻(みのどん)〕 1

○それでげいしやもねへもんだハ子 (二下3ウ4)

<ネエカ>

〔職人→仲間〕 1

○^ね松^{まつ}てめへにしたとこがさうじやアねへか (初23ウ6)

〔商法個→商兵衛〕 1

○^{いそ}急に^{いそ}買^か手^てハねへか子 (三上9ウ2)

〔あくぬけした男→友先生〕 2

○大^{だい}わらひのはなしじやアねへか (二上18オ7)

○なんぞ新^{あたら}きやうげん^{げん}のたねになるはなしハねへかと買^か出し^{だし}に来^きると (二上19オ6)

〔新聞好きの男→愚助〕 1

○ナントおかし^{おかし}い奴^{やつ}があるもんぢやアねへか子 (三下20オ3)

〔文盲の男→安さん〕 3

- みんながかんしんしたらうじやアねへか (二下10ウ1)
- すぐに針はりがてるといふからふしぎじやアねへか (二下10ウ8)
- おそれいつたもんじやアねへか (二下12オ8)

〔なまけものの男→半ちゃん〕 3

- おいらに出でつくわせたらうじやアねへか (初10ウ6)
- エ、コウ。い、じやアねへか。(初11ウ6)
- 一トばんもか、したことがあるめへじやアねへか (初12ウ3)

〔馬→牛〕 1

- 入い簡かんに生なれかへるどうりじやアねへか (三上7ウ7)

〔歌妓→箱廻 (みのどん)〕 1

- まだい、じやアねへか (二下7ウ6)

〈ネエノ〉

〔商法個→商兵衛〕 1

- 五分ごぶんもはずれたことのねへのそこが (三上12オ8)

2-2. 形容詞「ない」と「ねえ」の否定表現体系

以上の結果を整理すると、形容詞「ない」と「ねえ」の実態は第1表のよう

第1表

	使用度数			使用者数	
	ナイ	ネエ	計	ナイ	ネエ
未然	1		1	1	
連用	11		11	8	
終止	28	25	45	10	12
連体	15	19	34	6	8
仮定	6		6	6	
命令					
計	61	44	105	16	13

になる。ナイは五活用形（古語形ナシは終止形のみ）、ネエは二活用形である。そこで、終止形と連体形のナイとネエの使用度数を比較すると、使用者数との関係からみて、ほぼ同じように使用されている。

そこで、ナイとネエの終止形と連体形は、どのように使い分けられているか、あるいは、共通した用法をもっているかどうかを、下接語の種類、待遇関係、話し手の位相、

活用体系、の面から考察してみよう。

2-2-1 下接語の種類

終止形と連体形の下接語を整理すると次のようになる。

〔終止形の場合〕

ナイ……ガ・カラ・シ・テ（終）・ト（格）・ネエ・ヨ・（終止用法）

ナシ……ト（格）・ニ・（終止用法）

ネエ……ガ・カラ・ケレド・シ・ゼ・ト（格）・ト（接）・ヨ・ワエ・（終止用法）

〔連体形の場合〕

ナイ……カ・ノ・（連体用法）

ネエ……カ・ノ・（連体用法）

終止形の場合、ナイは終止用法のほかに7種の下接語がつき、ナシは2種、ネエは9種の下接語がある。そして、ナシの下接語が少ないのは、この活用形の用法が制限されていることを示すものであろう。連体形の場合は、連体用法のほかに、ナイは2種、ネエも2種で全く同じである。そこで、終止形の場合について、その下接語を比較すると、

(Ⅰ) ナイ・ナシ・ネエ共通……ト（格）

(Ⅱ) ナイ・ネエ共通……ガ・カラ・シ・ヨ

(Ⅲ) ナイ専用……テ・ネエ

(Ⅳ) ナシ専用……ニ

(Ⅴ) ネエ専用……ケレド・ゼ・ト（接）・ワエ

となる。(Ⅰ)と(Ⅱ)の共通の下接語は、格助詞(ト)、接続助詞(ガ・カラ・シ)、終助詞(ヨ)で、いずれも基本的下接語である。専用の場合についてみると、(Ⅲ)ナイ専用のテは〔士→町人〕、ネエは〔歌妓→箱廻〕へ使用され、上→下の関係にあり、(Ⅳ)ナシ専用のニは〔車夫→仲間〕と〔歌妓→箱廻〕に対等か上→下の関係で、(Ⅴ)ネエ専用のケレドは〔職人→仲間〕、ゼは〔商法個→商兵衛〕、ト(接)は〔野幫間→客〕、ワエは〔職人→仲間〕へ使われ、対等か下→上の関係で、相違がみられる。そこで、話し手と聞き手との関係について考察してみよう。

2-2-2 待遇関係

上下の関係が明らかな話し手と聞き手の関係(対等の関係は除く)をみると、次のようになる。

〔ナイの場合〕

上→下の関係 士→町人…ナイ（終止用法）・ナイガ・ナイテ・ナイ（連
体用法）・ナイカ

娼妓→茶屋の女中…ナイガ・ナイヨ・ナイ（連体用法）・
ナイカ

歌妓→箱廻…ナイト・ナイネエ・ナイヨ・ナイカ

下→上の関係 野幫間→客…ナイ（終止用法）
〔ナシの場合〕

上→下の関係 士→町人…ナシト
娼妓→茶屋の女中…ナシ（終止用法）
歌妓→箱廻…ナシニ

〔ネエの場合〕

上→下の関係 娼妓→茶屋の女中…ネエト
歌妓→箱廻…ネエ（連体用法）・ネエカ

下→上の関係 芝居者→旦那…ネエガ
野幫間→客…ネエト

ナシは上→下の関係で逆がないが、ナイとネエは上→下の関係でも下→上の関係でも用いられている。そして、これらのほかの話し手と聞き手とは対等の関係にある。そこで、ナシの場合は用例数が少いので保留すると、ナイとネエの終止形と連体形は、敬意・丁寧あるいは軽卑の待遇意識を表わすことはなかったものと考えられる。待遇意識を示したのは、デ・ゼ・ワエなどの終助詞と考えてよいであろう。

2-2-3 話し手の位相

そこで、話し手の身分・職業・性別との関係をみていくことにしよう。まず、話し手を性別と身分によって分類すると次のようになる。なお、身分のはっきりしない人物は〔他〕として扱い、話し手が終止形と連体形を使用していない場合には*印をつけた。

〈男〉〔士〕 1 士
〔工〕 1 職人
〔商〕 2 商人・*町人

〔他〕10 藪医者・新聞好きの男・あくぬけした男・文盲の男・芝居者
・野幫間・なまけものの男・馬・車夫・西洋好きの男

〈女〉〔女〕4 娼妓・歌妓・茶店女（ころ）・それしゃあがり（ひき）

この分類によって、ナイ系とネエ系の使用度数をみると、第2表のようになる。終止・連体形は、〔士〕はナイ・ナシ専用，〔工〕〔商〕はネエ専用であって、ここに身分のちがいがあらわれている。

第2表

		使用 度数	身分別使用度数					使用 者 数					使用 者数
			士	工	商	他	女	士	工	商	他	女	
未 然	ナク	1	1					1					1
	ナカッ	1	1					1					1
連 用	ナク	10	3	2	4	1	1	1	4	1	7		
	ナイ	24	5		7	12	1		4	4	9		
終 止 連 体	ナイ	15	2		1	12	1		1	4	6		
	ナシ	4	1		1	2	1		1	2	4		
終 止 連 体	ネエ	25	5	5	13	2	1	1	8	2	12		
		19	3	3	11	2	1	1	5	1	8		
仮 定	ナケレ	6	1		3	2	1		3	2	6		

そこで、〔他〕と〔女〕について、（Ⅰ）ナイ・ナシ専用，（Ⅱ）ネエ専用
（Ⅲ）ナイ・ナシ・ネエ混用を基準に分類すると、〔他〕は、

（Ⅰ）ナイ・ナシ専用 1 車夫

（Ⅱ）ネエ専用 3 芝居者・なまけものの男・馬

（Ⅲ）ナイ・ナシ・ネエ混用 5 藪医者・あくぬけした男・新聞好きの男
・文盲の男・野幫間

となり、〔女〕は

（Ⅰ）ナイ・ナシ専用 1 それしゃあがり（ひき）

（Ⅲ）ナイ・ナシ・ネエ混用 3 娼妓・歌妓・茶店女（ころ）

となる。

そこで、終止形と連体形を基準として、（A）ナイ・ナシ専用者 （B）ナイ・ナシ・ネエ混用者 （C）ネエ専用者 （D）終止形・連体形不使用者に

分けると、

〈男〉

(A) ナイ・ナシ専用者

〔士〕士

〔他〕車夫

(B) ナイ・ナシ・ネエ混用者

〔他〕藪医者・あくぬけした男・新聞好きの男・文盲の男・野幫間

(C) ネエ専用者

〔工〕職人

〔商〕商法個

〔他〕芝居者・なまけものの男・馬

(D) 終止形・連体形の不使用者

〔商〕町人

〔他〕西洋好きの男

〈女〉

(A) ナイ・ナシ専用者

〔女〕それしゃあがり(ひき)

(B) ナイ・ナシ・ネエ混用者

〔女〕娼妓・歌妓・茶店女(ころ)

とグループ化できる。なお、車夫は(A)に入るが、ナシ1例による基準で分類されているので、これを保留すると、男の(A)ナイ・ナシ専用者と(C)ネエ専用者の間には明らかな身分・職業のちがいがみられ、(B)ナイ・ナシ・ネエ混用者は、この両者の中間に位置するものと解釈される。そして、そこには教養のちがいもみられる。女は、50才にちかいそれしゃあがりの「ひき」が、他の若い女との間に使用差を示している。性別では、女にネエの専用者がみえないが、これは話し手にかたよりがあるためであろうか。

2-2-4 活用体系

以上の分類基準によって、人物別・活用形別にナイ系とネエ系の使用状態をみると、第3表のようになる。

第3表

性別	身分・職業	話し手	活用形		ナイ		ネエ		ナケレ	計	
			未然形	連用形	終止形	連体形	終止形	連体形			
男	(A)	士		3	5	2	1			11	
	(B)	藪 医 者	1	1	4		1			7	
		あくぬけした男			1		1	2		4	
		新聞好きの男		1		1	1	1	1	5	
		文盲の男			1		4	3		8	
	(C)	野 幫 間			1		1		1	3	
職 人						5	3	1	9		
商 法 個			1			5	3		8		
(D)	芝 居 者					1			2		
	なまけもの						4		4		
	馬		1			3	1		5		
(A)	町 人			2					2		
	西洋好きの男							1	1		
	車 夫	1				1			2		
(B)	(A) それじゃあがり(ひき)			5	4			1	10		
	娼 妓			2	3	1	1		7		
	歌 妓		1	4	1	1		2	10		
	茶店女(ころ)			1	4		1		6		
計			1	10	24	15	4	25	19	6	105

すなわち、全活用体系で比較すると、(A)ナイ系専用者と、ナイ系とネエ系の共用者で、(B)未然・連用・終止・連体・仮定の五活用形にナイを用い、しかも終止・連体形にネエ系を並用するものと、(C)未然・連用・仮定の三活用形がナイ系で、終止・連体の二活用形がネエ系で、相補う関係になっている場合とがある。そして、その違いが、身分や職業の違いをあらわしており、これが明治初期東京語における存在・指定・状態の否定表現体系である。そして、このような言葉の違いが、逆に、封建的身分制を成立させていたものであり、その存在理由であったと考えられる。

3. 動作の否定表現体系——助動詞の場合——

動作の否定を表現するには、助動詞「ない」「ねえ」「ぬ」「ん」が用いられるが、まず、「ない」と「ねえ」と、「ぬ」と「ん」との場合に分けてその実態を明らかにし、それから両者の関係を見ることにしよう。

3-1. 助動詞「ない」「ねえ」の実態

助動詞「ない」は連用形（ナカッ・ナク・ナン）、終止形（ナイ）、連体形（ナイ）、仮定形（ナケレ）の四活用形があり、長音化した「ねえ」は、終止形（ネエ）、連体形（ネエ）の二活用形がある。そこで、(1)ナイ系、(2)ネエ系に分け、それぞれを活用形別・下接語別・人物別にみていくことにしよう。なお、過去の打消をあらわす「ナンダ」は「ナン」+「タ」として扱った。

(1) ナイ系

連用形

<ナカッタ>

〔西洋好きの男→客〕1

○こんな清潔なものをなぜいままで喰へなかつたのでござせう（初7オ1）

〔文盲の男→安さん〕1

○雨といふものハートつぶもふらなかつた時（二下11オ8）

〔芝居者→旦那〕1

○留公とさしで寂しくツてならなかつたトおつしやつたを（三上16ウ7）

〔茶店女（ころ）→それしゃあがり（ひき）〕1

○今までおまへにもはなさなかつたが（三下4ウ2）

〔それしゃあがり→茶店女（ころ）〕1

○まがわるくツてはいられなかつたハ子（三下3オ5）

<ナク>

〔娼妓→茶屋の女中（おはね）〕1

○作さんもだれかにしやかれたと見へて乗なくなつてしまふし（二上9オ4）

<ナクッテモ>

〔茶店女（ころ）→それしゃあがり〕 1

○アレサとめなくツてもいゝからサ（三下13オ7）

〈ナンダ〉

〔士→町人〕 1

○ハイ僕なぞも矢張因循家のたちであまり肉食にくじへせなんだが（二下16オ2）

終止形

〈ナイ〉

〔歌妓→箱廻（みのどん）〕 1

○どふしたらよからうエ、かまへない（二下8オ6）

〔茶店女（ころ）→それしゃあがり〕 1

○かまへないはなしてしまふからみんなにへない〜（三下9オ4）

〈ナイガ〉

〔娼妓→茶屋の女中（おはね）〕 1

○おまへのうちへへすまないがあひたいむしんをいつて（二上12ウ2）

〔茶店女（ころ）→それしゃあがり〕 1

○仕度しどへ別段べつだんいらないが身みのままはりりをかかざざつつててくる手てああててが二十両にじゅうりょうで（三下6ウ3）

〈ナイカラ〉

〔客→娼妓〕 1

○とりこんでゐてあへれないからいづれ茶屋ちやゑ迄までたづねるから（二上8ウ7）

〔娼妓→茶屋の女中（おはね）〕 1（注1）

○モウ〜あんな小うるせへきやくハつとまらないからことへらうかとおもふとたんへ（二上9ウ5）

〔歌妓→箱廻（みのどん）〕 1

○わたりものもきさまないからけいしや料理りょうりやのためにやアいゝけれとも（二下6ウ3）

〔それしゃあがり→茶店女（ころ）〕 1

○山くじらのうまいはなしをするのでたべたくツてならないから雪ゆきがふつて見世みよをはやくはねたばんがたに（三下2ウ8）

〈ナイシ〉

〔娼妓→茶屋の女中（おはね）〕 3

○金銀きんぎんづくであいそをつかさねるのへざんねんでならないし。（二上12オ4）

- ^年季もきふにやア入れられないし(二上12オ5)
- 日ゝの小づかひにもこまらないしもの日のしまひもしてもらうし(二上12ウ7)
- 〈ナイト〉(「ト」格助詞)
- 〔娼妓→茶屋の女中(おはね)〕2
- まんざらくめんができないといつてやつたら(二上10オ7)
- なにのめないとエ(二上14オ6)
- 〔新造(小の町さん)→娼妓〕1
- てうどいいきれめだからできないといつてことへつておしまひなんし(二上11ウ2)
- 〔^{いよ}歌妓→箱廻(みのどん)〕1
- いつまでもうだつゝあがらないとおもふから(二下7オ6)
- 〔それしゃあがり(ひき)→茶店女(ころ)〕1
- その気でなければ^た生物^の食へないト^内へ^取よせてたべたが(三下3ウ7)
- 〈ナイト〉(「ト」接続助詞)
- 〔^{いよ}歌妓→箱廻(みのどん)〕1
- 三日にあげずたべないとなんだかからだのくあひがわるいやうだヨ(二下1ウ4)
- 〔それしゃあがり(ひき)→茶店女(ころ)〕1
- はじまりをきいてをちをきかないと^氣になるハ子(三下8ウ8)
- 〈ナイナンゾ〉
- 〔茶店女(ころ)→それしゃあがり(ひき)〕1
- おひきさんお^前もうし^はたべないなんぞとこのあひだ^氷月^でおい、だつたが(三下1ウ6)
- 〈ナイヨ〉
- 〔^{いよ}歌妓→箱廻(みのどん)〕1
- ゆだんもすきもなりやアしないヨ(二下6オ8)
- 〔それしゃあがり→茶店女(ころ)〕1
- とうもさきでたべるやうにやアいかないヨ(三下4オ1)
- 〈ナイワ〉
- 〔^娼妓→茶屋の女中(おはね)〕1
- 五両どころか壱分のさんだんもできやアしないハ子(二上10オ4)
- 〔^{いよ}歌妓→箱廻(みのどん)〕1
- どんなにつらいかしれやアしないハ子(二下7オ4)

連体形

<ナイ>

〔娼妓→茶屋の女中（おはね）〕 1

○初会にもでられないしまつの延へ（二上9オ5）

〔新造（小の町さん）→娼妓〕 1

○年もいかないわちきの口からしつれいぎますけれど（二上11ウ3）

〔歌妓→箱廻（みのどん）〕 3

○かみほとけへ手があへされないぞといちづに思つてみたが（二下2オ1）

○みんなが異人なれないもんだから（二下2オ7）

○鶏卵のからがとれもしないおきやアけいしやのくせをして（二下5ウ7）

〔茶店女（ころ）→それしゃあがり（ひき）〕 3

○一生こまらせないやうにしてやる（三下7オ2）（注2）

○日本にうまれて千里万里さきのあたかもしれない遠人なんぞのなぐさミ物になるの
へ（三下7オ6）

○だれもすゝめもしないくせに（三下10ウ3）

〔それしゃあがり→茶店女（ころ）〕 2

○おころさんおまへもひらけないことをいふ子じやないか（三下2オ2）

○年のまだはやらないじぶんから（三下2ウ3）

<ナイカ>

〔町人→牛店の女中〕 1

○コレ〜あねへ（中略）鍋が煮ついたからとりかへてくれないか（二下22ウ5）

<ナイジャア>

〔歌妓→箱廻（みのどん）〕 1

○それでもしらないちやアくやしいと思ふので（二下4オ8）

<ナイデ>（注3）

〔音ちゃんの使い→娼妓〕 1

○おつちやんのところから（中略）頭取であひとの一座だから釜がたりないでひよつと
はちをかくといけないから（二上9ウ8）（注4）

<ナイノ>

〔歌妓→箱廻（みのどん）〕 1

○ヤレあのお座敷へへでられないのとサ（二下2ウ7）

〔茶店女（ころ）→それしやあがり〕 2

○それがひらけないのだとすゝめられると（三下5オ7）

○今の世せかいにまりとへつかないのハヤボのゆきどまりで（三下5オ7）

仮定形

〈ナケレバ〉

〔生文人→仲間〕 1

○先生が^い出て給^いへらなければ^い枕山（中略）の諸先生^いたちが（初25オ1）（注5）

〔藪医者^いの独語〕 1

○^い洋薬の名目も^い口元だけのおほへなければならんが（三上19オ6）

(2) ネエ系

終止形

〈ネエ〉

〔新聞好きの男→客〕 1

○^い伝蘭の誤^いがねへともい^いれねへ（三下16オ5）

○^い荷の役^いにもたちやアしねへ（三下20オ5）

〔あくぬけした男→友先生〕 1

○^い面^いでばかりのいろしねへ（二上18ウ5）

〔なまけものの男→半ちゃん〕 2

○^い駒染金散財^いにやア代^いられねへ（初11ウ1）

○^い組^いで八十^いのつづかねへ（初13ウ3）

〔野幣間^い→客〕 1

○見^いかけねへかほだがどうもわからねへ（初19オ8）

〔牛→馬〕 1

○ア、^い牛のねもでねへ（三上7ウ13）

〔それしやあがり（ひき）→茶店女（ころ）〕 1

○うまい、ましツケへ、ンあきれもしねへ（三下12ウ4）

〈ネエガ〉

〔あくぬけした男→友先生〕 1

○そこまでにやアいたらねへがこりやアきつと奇妙^いだヨ（二上16ウ5）

〈ネエカラ〉

〔商法個^い→商兵衛〕 1

- 手を^{ひら}げることができねへから（三上11ウ1）
〔西洋好きの男→客〕1
- ^り発^り理^り学^りを^ひ弁^りねへからのことでゲス（初7ウ2）
〔あくぬけした男→友先生〕1
- 洋^りふ^りく^りの^りさん^りだ^りん^りも^りで^りき^りね^りへ^りか^りら^り半^り髪^りあ^りた^りま^りを^りた^り、^りか^りれ^りて^りる^りの^りだ^りが（二上15オ2）
〔文盲の男→安さん〕1
- や^りま^りぶ^りき^りと^りい^りふ^り物^りの^り花^りが^りさ^りい^りて^りも^り実^りが^りな^りら^りね^りへ^りか^りら^りの^りこ^りと^りを^りひ^りき^りだ^りし^りた^りの^り（二下12オ7）
〔なまけものの男→半ちゃん〕2
- さ^りき^りが^りこ^りわ^りが^りつ^りて^り相^り手^りに^りし^りね^りへ^りか^りら^り嶋^りば^りら^りへ^りで^りも^り巢^りを^りか^りへ^りや^りう^りと^りお^りも^りつ^りて^りる^りの^りサ（初12ウ1）
- お^りも^りし^りろ^りい^りあ^りそ^りび^りの^りで^りき^りね^りへ^りか^りら^りず^りつ^りと^り世^り界^りを（初13オ7）
〔芝居者→旦那〕1
- し^りみ^りつ^りた^りれ^りな^り樹^りの^り植^り込^りま^りね^りへ^りか^りら^りお^りの^りづ^りか^りら（三上13ウ6）
〈ネエケリヤア〉
〔商法個→商兵衛〕1
- 人^りへ^り大^りき^りな^りこ^りと^りを^りの^りぞ^りま^りね^りへ^りけ^りり^りや^りア^り開^り化^りの^り人^り物^りじ^りや^りア^りね^りへ^りヨ（三上12オ6）
〈ネエゼ〉
〔あくぬけした男→友先生〕1
- 物^り知^りり^りだ^りの^りと^りい^りへ^りれ^りて^りう^りる^りさ^りく^りつ^りて^りな^りら^りね^りへ^りゼ（二上19ウ3）
〈ネエダ（ロウ）〉
〔職人→仲間（松）〕1
- 酒^りを^り見^りか^りけ^りち^りや^りア^りに^りげ^りら^りれ^りね^りへ^りだ^りら^りう（初20ウ7）
〈ネエト〉（「ト」格助詞）
〔馬→牛〕1
- す^りべ^りて^りせ^りう^りあ^りる^りも^りの^りへ^りそ^りれ^り〜^り御^り奉^り公^りを^りせ^りに^りや^りア^りな^りら^りね^りへ^りと^りあ^りる^り先^り生^りが^りお^りつ^りし^りや^りつ^りた^りの^りを（三上7ウ2）
〈ネエト〉（「ト」接続助詞）
〔商法個→商兵衛〕1
- お^りい^りら^りア^り神^り戸^りへ^り行^りか^りね^りへ^りと^り爰^りで^りい^りく^りら^りも^り買^りふ^りの^りだ^りけ^りれ^りど（三上10ウ6）
〔それしやあがり（ひき）→茶店女（ころ）〕1

○私ちがゐねへと南馬道のぬけうらあたりへそれられたり（三下12ウ6）
〈ネエヨ〉

〔商法個→商兵衛〕2

○はじめの牛店なんぞへめつたにはいらねへヨ（三上8ウ2）

○そんな不勉強じやアもうからねへヨ（三上12ウ5）

〔新聞好きの男→愚助〕1

○洋学でなけりやア夜へあけねへヨ（三下14ウ8）

〔なまけものの男→半ちゃん〕1

○彼等どうも友を呼でならねへヨ（初13ウ5）

〈ネエワ〉

〔文盲の男→安さん〕1

○百姓のむすめでもばかにやアならねへハサ（二下12オ6）

連体形

〈ネエ〉

〔職人→仲間（松）〕1

○二分の札がなけりやアびんぼうゆるぎもできねへからだで（初23オ3）

〔商法個→商兵衛〕4

○いくら噓んでもちぎれねへ古臭くなつた老牛を食へせられたので（三上9オ3）

○ぼつとしねへうち買イ込むのだけ（三上10ウ5）

○佳くいけーしほのおなぐさミだがまづ損へしねへつもりサ（三上11ウ3）

○大六や伊勢勝なんぞにもおとらねへ身生に成つて（三上12オ3）

〔西洋好きの男→客〕2

○ひらけねへ奴等が肉食をすりやア（初7オ8）

○ヤレ穢れるのとわからねへ野暮をいふのは（初7ウ1）

〔芝居者→旦那〕1

○三町ながら飾り物へしねへなかで（三上14オ2）

〔落語家→若旦那〕4

○エモシひらけねへ手あひじやアごせへせんか（三上23オ6）

○私もしかにならねへ前方便人の弟子ぶんになりやして（三上24ウ8）

○高座の前で訳りもしねへくせに悪口をきいたり（三上25オ4）

○若だんなもあんまりあがらねへ方だから（三上25オ8）

〔落語家→牛店の女中〕 1

○気がきかねへ少女^メ夕^タ (三上22ウ7)

〔野幫間→客〕 1

○堀^{ほり}じやア見^みかけねへかほだが (初19オ7)

〔牛→馬〕 1

○うまれてものごゝろがつくかつかねへうちに (三上6オ8)

〔馬→牛〕 2

○ひさしくあ^あねへうちてめへ^めたいそうしゆつせして (三上6オ2)

○まだにんげんがひ^ひらけねへところから (三上6ウ5)

<ネエカ>

〔商法個→商兵衛〕 2

○どうだおめへ^め買^かねへか (三上9ウ7)

○それより^{より}赤銅^{せきどう}を買^かつて見^みねへか (三上10ウ3)

〔唐物屋の番頭→車夫〕 1

○大いそきて川はたまでやらねへか (二下13オ7)

〔あくぬけした男→友先生〕 1

○ヲヤおめへへべらい先生をし^しらねへか (二上17ウ8)

〔なまけものの男→半ちゃん〕 1

○^あん子^こ屋^やのしん^{しん}造^{ぞう}衆^{しゆ}が客^{きやく}のくるかこねへかを (初13オ5)

<ネエジャア>

〔商法個→商兵衛〕 2

○爰^{こゝ}で代^{しろ}物を^{しろ}楮^{しゆ}幣^{へい}に引^ひ替^かねへじやア (三上9ウ5)

○大^{おほ}商^{しょう}法^{ぽう}ハ洋^{やう}航^{かう}しねへじやア^あ大^{だい}利^りがねへから (三上11ウ6)

〔落語家→若旦那〕

○^あん^ん荷^かでも^も牛^うをやらねへじやアすこやかにや^やいきやせん (三上23オ2)

<ネエデ>

〔商法個→商兵衛〕 2

○イ^いヤ^や事^{こと}跡^{あと}ねへで下^{した}女^{によ}なんぞがからツ^つきし^し半^{はん}間^{かん}で (三上8ウ7)

○^あん^ん替^かりに手^てを付^つねへでかんちやうをして (三上9オ5)

<ネエノ>

〔西洋好きの男→客〕 1

○榊^かへ手が^かさされねへのヤレ^か織れるのと（初7ウ1）

〔新聞好きの男→愚助〕2

○支^か那^か風^かでいふから解^かさねへのもむべなり〜（三下14オ6）

○西洋^かのはなしなぞへできねへのサ（三下20オ7）

3-2 助動詞「ない」「ねえ」の否定表現体系

以上の結果を整理すると、第4表のよう

第4表

になる。終止形と連体形のナイとネエは、使用者数からみて終止形のナイの使用度数が高いほかはほぼ同じように使用されている。そこで、ナイとネエの終止形と連体形がどのように使い分けられているか、また、共通した用法をもっているかどうか考察してみよう。

	使用度数			使用者数	
	ナイ	ネエ	計	ナイ	ネエ
未然					
連用	8		8	7	
終止	23	27	50	6	12
連体	18	30	48	7	12
仮定	2		2	2	
命令					
計	51	57	108	12	14

3-2-1 下接語の種類

まず、終止形と連体形の下接語についてみると、次のようになる。

〔終止形の場合〕

ナイ……ガ・カラ・シ・ト（格）・ト（接）・ナンゾ・ヨ・ワ・（終止用法）

ネエ……ガ・カラ・ケリヤア・ゼ・ダ・ト（格）・ト（接）・ヨ・ワ・（終止用法）

〔連体形の場合〕

ナイ……カ・ジャア・デ・ノ・（連体用法）

ネエ……カ・ジャア・デ・ノ・（連体用法）

終止形の場合は、終止用法のほか、ナイは8種の下接語がつき、ネエは9種が下接する。連体形の場合は4種が下接して、全く同じである。そこで、終止形の場合の下接語を比較すると、

(I) ナイ・ネエ共通……ガ・カラ・ト（格）・ト（接）・ヨ・ワ

(II) ナイ専用……シ・ナンゾ

(Ⅲ) ネエ専用……ケリャア・ゼ・グ

となる。すなわち、共通は6種、ナイ専用は2種、ネエ専用は3種である。そして、ナイ・ネエ共通の下接語は、格助詞(ト)、接続助詞(ガ・カラ・ト)、終助詞(ヨ・ワ)で、いずれも基本的な下接語である。連体形もいずれも同じ下接語で基本的下接語である。専用の中では、ケリャアは今日用いられなくなったもので、ナイケレバがネエケリャアと音変化したものである。ナイ系にはナケレバが使用されているので比較すると、ナケレバは〔生文人→仲間〕〔藪医者^藪の独語〕で用いられ、ネエケリャアは〔商法個→商兵衛〕の関係で使っており、話し手の職業と教養の差があらわれている。

3-2-2. 待遇関係

そこで、話し手と聞き手との関係をみると、上下関係の明らかなのは、〔ナイの場合〕

上→下の関係 娼妓^{おいら}→茶屋の女中 ナイガ・ナイカラ・ナイシ・ナイト・ナイワ・ナイ (連体用法)

下→上の関係 新造→娼妓 ナイト・ナイ (連体用法)

〔ネエの場合〕

上→下の関係 落語家→牛店の女中 ネエ (連体用法)

下→上の関係 芝居者→旦那 ネエカラ・ネエ (連体用法)

落語家→若旦那 ネエジャア・ネエ (連体用法)

野幫間→客 ネエ (終止用法)・ネエ (連体用法)

の通りで、ナイ系もネエ系も、いずれも上→下、下→上の関係で用いられている。したがって、終止形・連体形において、ナイとネエとは待遇を示すことはなかったものと考えられる。

3-2-3. 話し手の位相

そこで、話し手の身分・職業・性別との関係をみてみよう。『安愚楽鍋』の話し手を性別と士農工商の身分の明らかな人と、その他に分けてみると次のようになる。

〈男〉〔工〕1 職人

〔商〕3 町人・商法個・唐物屋の番頭

〔他〕12 新聞好きの男・あくぬけした男・西洋好きの男・芝居者・落語家・野幫間・文盲の男・なまけもの男・牛・馬・*生文人・
*數医者（*印は終止・連体形を使用していない）

〈女〉〔女〕5 娼妓・新造・歌妓・それしゃあがり（ひき）・茶店女（ころ）
このグループにしたがって使用度数をみると、第5表のようになる。

第5表

		使用 度数	身分別使用度数		身分別使用者数		使用 者数
			士	工 商 他 女	士	工 商 他 女	
連 用	ナカツ	5		3 2		3 2	5
	ナク	2		2		2	2
	ナン	1	1		1		1
終 止 連 体	ナイ	22		22		5	5
		15		1 14		1 5	6
終 止 連 体	ネ エ	27	1	5 19 2	1	1 9 1	12
		30	1	11 18	1	2 9	12
仮 定	ナケレ	2		2		2	2

すなわち、助動詞の終止形・連体形において〔士〕は使用していないので、〔工〕〔他〕がネエ専用で、〔商〕〔女〕がナイ・ネエ共用である。なお、〔商〕のナイ使用者は町人でネエを使用しておらず、「いずれかの大藩の公用方」であった武士と話している人物で、〔商〕とはいえ商法個とは比較にならない大商人のようである。この人物を別(注6)とすれば、〔工〕〔商〕がネエ専用となり、形容詞の場合と同様に、〔士〕と〔工〕〔商〕とでは身分差がことばに反映しているものと考えられる。いいかえれば、ナイとネエは、待遇をあらわすのではなく、話し手の身分を表わすものと考えられる。〔女〕は、それしゃあがり（ひき）がナイ・ネエ共用で、ほかの娼妓・新造・歌妓・茶店女（ころ）はナイ専用である。

そこで、終止形・連体形を基準として（A）ナイ専用者 （B）ナイ・ネエ共用者 （C）ネエ専用者 （D）終止形・連体形を使用していない人 に分けると次のようになる。

〈男〉

- (A) ナイ専用者
 - 〔商〕 町人
- (B) ナイ・ネエ共用者
 - (なし)
- (C) ネエ専用者
 - 〔工〕 職人
 - 〔商〕 商法個・唐物屋の番頭
 - 〔他〕 あくぬけした男・新聞好きの男・西洋好きの男・文盲の男・芝居者・落語家・野幫間・なまけものの男・牛・馬
- (D) 終止形・連体形を使用しない人
 - 〔士〕 士
 - 〔他〕 生文人・藪医者

〈女〉

- (A) ナイ専用者
 - 〔女〕 娼妓・新造・歌妓・茶店女(ころ)
- (B) ナイ・ネエ共用者
 - 〔女〕 それしゃあがり(ひき)

この基準によってナイとネエの使用者をグループ化すると、その実態は第6表のようになる。

すなわち、終止形と連体形は、男はネエ、女はナイが圧倒的で、男女差が明確にあらわれている。また、男は、〔士〕および教養人の(D)が終止形・連体形を使用していない点が注目される。

3-2-4 活用体系

なお、活用体系からみると、男は(A)ナイ系の町人と、(C)ナイ系(未然・連用・假定)とネエ系(終止・連体)の相補う体系とがあり、女は、(A)ナイ系と、(B)ナイ系(連用・終止・連体)とネエ系(終止)との混用系がある。

そこで、同じ否定をあらわす助動詞「ぬ」「ん」について見てみることにしよう。

第6表

性別	身分・職業	話し手	活用形		ナケレ			
			ナカツ	ナン	ナイ	ネエ		
			連用形	終止形	連体形	終止形	連体形	仮定形
男	(A)	町人			1			
	(C)	職人				1	1	
		商法個				5	10	
		唐物屋の番頭					1	
		あくぬけした男				4	1	
		新聞好きの男				3	2	
		西洋好きの男	1			1	3	
		文盲の男	1			2		
		芝居者	1			1	1	
		落語家					6	
		野幫間				1	1	
	なまけものの男				5	1		
	牛				1	1		
	馬				1	2		
(D)	士		1					
生文人							1	
薮医者							1	
女	(A)	娼妓	1	8	1			
	新造	歌妓		1	1			
		茶店女(ころ)	1	1	3	5		
	(B)	それじゃあがり(ひき)	1	4	2	2		

3-3 助動詞「ぬ」「ん」の実態

助動詞「ぬ」は連用形(ズ)、終止形(ヌ)、連体形(ヌ)、仮定形(ネ)の四活用形があり、「ん」は終止形(ン)、連体形(ン)の二活用形がある。ただ、「ぬ」「ん」は常体と敬体とで用いられるので、〔常体〕(1)ヌ系、(2)ン系、〔敬体〕(3)マセヌ系、(4)マセン系、(5)ヤセン系、(6)セン系に分けてみていくことにする。なお、「ごうせん」は「ごせえせん」の省略形と考え、「セン系」に

扱った。

(1) 又系

連用形

<ズ>

〔士→町人〕 2

- そのかたちの大きい小さいに不関係かいるかたがら重おもいもとんちやくなく (二下17ウ1)
- 紡織紡の工かへすこしもこ、ろえずうたじやうるりやをどりなどの遊藝遊のミをこのんで (二下18オ8)

〔歌妓→箱廻ばいしよ(みのどん)〕 2

- しまひまでまんそくにひひけずひがすミも (二下3ウ1)
 - 三日にあげずたべないとなんだかからだのくあひがわるいやうだヨ (二下1ウ4)
- <ズト>

〔それしゃあがり→茶店女(ころ)〕 1

- まアよさずとい、からあとをおはなしヨ (三下8ウ7)

<ズニ>

〔士→町人〕 1

- 釜銀銅鉄くわぎんどうてつの精密な比例ひれいも知らずに鉄錢銅錢てつせんどうせん入レ交まて (二下17オ6)

〔町人→士〕 2

- 肉食にくじきへけられるものとおぼへましてとんと用ひすにをりましたが (二下16オ8)
- 日本にっぽんへわわたらずにすみましたと見へますテ (二下16ウ3)

〔あくぬけした男→友先生〕 1

- コレサぼんやりしずにモウいつべをやらかしねへ (二上19ウ6)

〔文盲の男→安さん〕 1

- 山やまぶきの花はなをぼんへのせて持もつてきてものもいはずに出いすと (二下12オ1)

〔車夫→同僚(力)〕 2

- ねもきめずにすくにのせたハ (二下13オ8)
- とこもしかずに寝いてしまつたが (二下15オ2)

終止形

<ヌガ>

〔生文人→仲間〕 1

- それハ偶つの附つ合あだから止とを得えぬが明日あしたハ (初26オ6)

<ヌテ>

〔士→町人〕 1

○そのまゝにハすておかれぬテ (二下17ウ5)

連体形

<ヌ>

〔生文人→仲間〕 1

○書畫しゆゑ会へハ出ぬことゝきめたが (初24オ7)

<ヌテ>

〔士→町人〕 1

○やがて人手ひとかたならぬでこまるやうになるであらう (二下21オ6)

<ヌモ>

〔士→町人〕 1

○外國ぐわいこくの實情じつじやうを知らぬもふじゆうで (二下21ウ4)

仮定形

<ニヤア>

〔藪医者やぶいしゃの独語〕

○すくンでばかりおらにやアならん (三上19ウ2)

〔馬→牛〕 1

○それ〜御奉公ごほうこうをせにやアならねへとある先生せんせいがおつしやつたのを (三上7ウ2)

<ネバ>

〔士→町人〕 1

○三日用さんじつようひねバ工くわ谷やがわるいやうちやから (二下16オ4)

(2) ン系

終止形

<ン>

〔生文人→仲間〕 1

○爰こゝにも足をとめるどがならん (初26オ6)

〔藪医者やぶいしゃの独語〕 2

○すくンでばかりおらにやアならん (三上19ウ3)

○ちゝむさい病人びやうにんなぞを煮焼にやくかへしにハしておられん (三上21ウ4)

<ンガ>

〔藪医者の独語〕 1

○洋薬の名目も口元だけのおぼへなければならんが髪くひそらして(三上19オ6)
〈ンカラ〉

〔生文人→仲間〕 1

○三幅對の山水を即席にした、めんければならんからチトつきあひははずすじやが
(初26オ8)

〔藪医者 of 独語〕 1

○直に脱走もきめられんから談合して見たところが(三上18ウ4)
〈ンケレバ〉

〔生文人→仲間〕 1

○三幅對の山水を即席にした、めんければならんから(初26オ8)

〔藪医者 of 独語〕 1

○あやうい橋も渡らんければまぐれ當りといふこともない(三上18オ8)
連体形

〈ン〉

〔生文人→仲間〕 1

○なにか呑たらんやうじやによつて牛店ときめたの(初26ウ2) (注6)
〈ンカ〉

〔鄙武士→牛店の女中〕 2

○女子一寸来ンカ(初15オ7)
○生の和味のをいま一皿くれンカ(初14ウ6)

(3) マセヌ系

終止形

〈マセヌ〉

〔町人→士〕 2

○貧いやら賤いやら條理がわかりませぬ(二下19ウ8)
○西洋流でなくての夜があげませぬ(二下22ウ1)

〈マセヌガ〉

〔町人→士〕 2

○此味をおぼへましたらわすられませぬが當夏の新聞に出ましたリントルポストと
やらの(二下16ウ1)

○おなじわりにハマりませぬが工匠の作料諸職の手間も（二下20オ7）

〈マセヌテ〉

〔町人→士〕1

○さほどにこまるはづへござりませぬテ（二下20ウ1）

(4) マセン系

終止形

〈マセン〉

〔牛店の女中→商法個〕1

○昆布へござりません（三上9オ1）

〈マセンカラ〉

〔芝居者→旦那〕1

○此頃へ助べゑありませんから牛肉の機能が見へやすめへ（三上17オ4）

〈マセンゼ〉

〔芝居者→旦那〕1

○おいらんのむかふ廳へいへせませんぜ（三上17オ8）

〔野帮間→客〕1

○ミやうりのわるいお方へござへませんぜ（初19ウ7）

連体形

〈マセンカ〉

〔芝居者→旦那〕1

○い、おもひつきじやアござへませんか（三上13オ6）

(5) ヤセン系

終止形

〈ヤセン〉

〔西洋好きの男→客〕2

○ぼたんや紅葉へくへやせん（初6ウ8）

○夏でも雪が降つたり氷が張るので往來ができやせん（初9オ5）

〔芝居者→旦那〕2

○入間へ腹がよくなくつちやア入つかはれやせん（三上14オ1）

○動きやアとれやせん（三上14オ8）

〔落語家→若旦那〕 3

- 牛をやらねへじやアすこやかにやアいきやせん (三上23オ 2)
- 高座でどんなにかしやべりい、かしれやせん (三上23ウ 3)
- 夜蓆がつとまりやせん (三上23ウ 5)

〈ヤセンカ〉

〔芝居者→旦那〕 1

- おめへさんのお顔だからしかたも有やせんが此頃の (三上17オ 4)

〔落語家→若旦那〕 1

- 客のあたまの減る氣づけへへござりやせんが初日から (三上23ウ 6)

〈ヤセンヨ〉

〔野幫間→客〕 1

- どんなめにあふかしれやせんヨ (初18ウ 6)

連体形

〈ヤセンカ〉

〔芝居者→旦那〕 2

- 見物の腹をまぐりやしたじやアごぜへせんか (三上14ウ 2)
- ナントすごい大將じやアごぜへやせんか (三上14オ 7)

〔車夫→客〕 1

- 旦那浅くさまで帰り車へおめしなせへやせんか (二下13ウ 7)

〈ヤセンノ〉

〔西洋好きの男→客〕 1

- 平人の口へは遣入やせんのだ (初 7オ 5)

(6) セン系

終止形

〈セン〉

〔西洋好きの男→客〕 1

- モシ西洋にやアそんなことへごウせん (初 7ウ 4)

〔芝居者→旦那〕 1

- 五分も透きやアごぜへせん (三上14ウ 4)

〈センゼ〉

〔野帯間→客〕 1

○ありやアたゞものじやアごぜへせんぜ (初19オ5)

連体形

〈センカ〉

〔西洋好きの男→客〕 1

○壱^{いち}から風^{かぜ}をもつてくる工^く風^{かぜ}ハ妙^{たふ}じやアごうせんか (初8オ1)

〔落語家→若旦那〕 2

○エモシひらけねへ手あひじやアごぜへせんか (三上23オ6)

○くぎりの飯^いをしめるとしやせうじやアごぜへせんか (三上25オ8)

〔野帯間→客〕 1

○柳橋^{りゅうしやう}邊^へでおうかれすぢやアごぜへせんか (初16ウ3)

3-4 「ぬ」「ん」の否定表現体系

以上の結果を整理すると、第7表のようになる。

第7表

	使用度数				使用者数			
	常体		敬体		常体		敬体	
	ヌ	ン	マセヌ	ヤセ ン	ヌ	ン	マセ ン	ヤセ ン
未然								
連用	12				7			
終止	2	8	5	4 10 3	2 2	1	3 4 3	
連体	3	3		1 4 4	2 2		1 3 3	
假定								
命令	3				3			
計	20	11	5	5 14 7	10 3	1	3 5 4	

常体ではヌが四活用形、ンが二活用形、敬体ではマセヌが一活用形、マセン、ヤセン、センがそれぞれ二活用形である。終止形と連体形の使用度は、使用者数が少ないので明確ではないが、ヌ系よりン系の方が常体も敬体も優勢なようである。

3-4-1 下接語の種類

終止形と連体形の下接語は、整理すると次のようになる。

[終止形の場合]

ヌ……ガ(接)・テ(終)

ン……ガ・カラ(接)・ケレバ(接)・(終止用法)

マセヌ……ガ・テ・(終止用法)

マセン……カラ・ゼ・(終止用法)

ヤセン……ガ・ヨ・(終止用法)

セン……ゼ・(終止用法)

[連体形の場合]

ヌ ……デ(接)・モ(係)・(連体用法)

ン……カ・(連体用法)

マセヌ……〈なし〉

マセン……カ

ヤセン……カ・ノ

セン ……カ

下接語の種類は、このように終止形が一種か二種か三種、連体形が一種か二種で、きわめて少ない。これは、ヌ・ンの用法が限定されていることを示すものであろう。

3-4-2 待遇関係

そこで、終止形と連体形の話し手と聞き手の関係をみると、上下関係が明らかなのは次の通りである。

[ヌの場合]

上→下の関係 士→町人 ヌテ・ヌデ・ヌモ

[ンの場合]

上→下の関係 鄙武士→牛店の女中 ンカ

[マセヌの場合]

下→上の関係 町人→士 マセヌ・マセヌガ・マセヌテ

[マセンの場合]

下→上の関係 芝居者→旦那 マセンカラ・マセンゼ・マセンカ
 野幫間→客 マセンゼ
 牛店の女中→商法個 マセン

〔ヤセンの場合〕

下→上の関係 車夫→客 ヤセンカ
 芝居者→旦那 ヤセンガ・ヤセンカ
 落語家→若旦那 ヤセン・ヤセンガ
 野幫間→客 ヤセンヨ

〔センの場合〕

下→上の関係 芝居者→旦那 セン
 落語家→若旦那 センカ
 野幫間→客 センゼ・センカ

すなわち、常体はヌもンも上→下の関係、敬体のマセヌ・マセン・ヤセン・センはいづれも下→上の関係にある。したがって、ヌ・ンとマセヌ・マセン・ヤセン・センとは互に相反する待遇関係にあったものと考えられる。

3-4-3. 話し手の位相

そこで、身分・職業・性別の明らかな人とその他の人に分けてみると、次のようになる。なお、*印は、終止形・連体形を使用していないことを示す。

〈男〉〔士〕2 士・鄙武士

〔商〕1 町人

〔他〕9 生文人・藪医者・西洋好きの男・芝居者・落語家・野幫間・
 車夫・*あくぬけした男・*文盲の男・*馬

〈女〉〔女〕3 牛店の女中・*歌妓・*それしゃあがり(ひき)

このグループにしたがって使用度数をみると、第8表のようになる。

すなわち、終止形・連体形についてみると、〔士〕はヌ系とン系を使用し、〔商〕はマセヌ系を用い、〔他〕はヌ・ン・マセン・ヤセン・セン系を使い、〔女〕はマセン系を使用している。したがって、〔士〕〔商〕〔女〕には、たがいに共通するものがなく、身分・職業・性別による使い分けがみられる。しかし、連用形は〔士〕〔商〕〔女〕および〔他〕のいずれも共通してヌ系のズ

第 8 表

			使用 度数	身分別使用度数			身分別使用者数			使用 者数														
				士	工	商	他	女	士		工	商	他	女										
常	未	然	ズ	12	3	2	4	3	2	1	3	2	7											
	終	止																						
体	連	止	ヌ	2	1	2	1	1	1	1	1	2	2											
	連	体																						
	終	止												ン	6	2	2	1	1	1	2	2		
	連	体																						
敬	終	止	マセヌ	5	5	5	1	1	1	1	1	1	1											
	連	止																						
	連	止												マセン	2	1	3	1	2	1	3			
	連	体																						
	体	終												止	ヤセン	6	3	10	4	4	4	4	4	4
		連												止										
連		体	セン	3	3	4	3	3	3															
連		体																						
常	仮	定	ネ	3	1	2	1	2	3															
体	命	令																						

を用いており、仮定形には〔士〕〔他〕でヌ系のネと、ネバの融合形ニャアとを用いている。

そこで、〔他〕の終止形・連体形の使用者を、〔士〕〔商〕〔女〕の否定語を基準として、(I)ヌ・ン使用 (II)マセヌ専用 (III)マセン専用 (IV)

ヤセン・セン使用 に分けてみると、〔他〕は、

(I)ヌ・ン使用 2 生文人・藪医者

(II)マセヌ専用 0

(III)マセン専用 0

(IV)ヤセン・セン使用 5 芝居者・落語家・野幫間・車夫・西洋好きの男となる。

そこで、終止形・連体形を基準として、(A)ヌ・ン使用者 (B)マセヌ専用者 (C)マセン専用者 (D)ヤセン・セン使用者 (E)終止形・連

体形の不使用者 に分けると、

〈男〉

(A) ヌ・ン使用者

〔士〕士・鄙武士

〔他〕生文人・藪医者

(B) マセヌ専用者

〔商〕町人

(D) ヤセン・セン使用者

〔他〕芝居者・落語家・野幫間・車夫・西洋好きの男

(E) 終止形・連体形の不使用者

〔他〕あくぬけした男・文盲の男・馬

〈女〉

(C) マセン専用者

〔女〕牛店の女中

(E) 終止形・連体形の不使用者

〔女〕歌妓・それしゃあがり

とグループ化できる。そして、男は (A) (B) (D) で、明らかな身分差がみられる。女は使用者が少なく明らかでない。

3-4-4 活用体系

そこで、以上のグループを基準として、人物別・活用形別に、ヌ・ン・マセヌ・マセン・ヤセン・センの使用状態をみると、次の第9表ようになる。

すなわち、全活用体系で比較すると、(A)に属する武士と教養人は、ヌとンの常体だけを用い、中でも土はヌ系だけである。(B)の町人は常体の連用形と敬体の終止形マセヌを使用し、(D)に属する人は連用形が常体で、終止形・連体形は敬体のマセン・ヤセン・センのン系である。(A) (B) (D)のグループの間には明確な使い分けがみられる。

また、(D)のグループは終止形・連体形がいずれも敬体である点が注目される。なぜなら、これらの待遇は、いずれも下→上であって、上→下、対等の関係がみられないからである。そこで、助動詞ナイ・ネエの用法と比較して動

作の否定表現体系を考察してみることにしよう。

第9表

			常 体			敬 体				常体					
			ズ	ヌ	ン	マセヌ	マセン	ヤセン	セン	ネ					
			未 然	連 用	終 止	連 体	終 止	連 体	終 止	連 体	終 止	連 体	仮 定	命 令	
男	(A)	士 武 士	3	1	2							1			
		鄙 生 藪		1	1	3	1						1		
	(B)	町 人	2				5								
	(D)	芝 居 者						2	1	3	2	1			
		落 語 家								4			2		
(E)	野 郎 間						1		1		1	1			
	車 夫	2								1					
		西洋好きの男							2	1	1	1			
	(E)	あくぬけした男	1												
		文 盲 の 男	1									1			
		馬													
女	(C)	牛 店 の 女 中						1							
	(E)	歌 妓	2												
		それしやあがり	1												
計			12	2	3	8	3	5	4	1	10	4	3	4	3

3-5 助動詞「ない」「ねえ」と「ぬ」「ん」との関係

3-5-1 下接語の種類

終止形と連体形の下接語を比較すると次のようになる。

ナイ 12 ガ(接)・カラ(接)・シ・ト(格)・ト(接)・ナンゾ・ヨ・
ワ・カ・ジャア・デ(接)・ノ

ネエ 13 ガ(接)・カラ(接)・ケリヤア(接)・ゼ・ダ・ト(格)・
ト(接)・ヨ・ワ・カ・ジャア・デ(接)・ノ

ヌ 4 ガ(接)・テ(終)・デ(接)・モ

ン 4 ガ(接)・カラ(接)・ケレバ(接)・カ

マセヌ 2 ガ(接)・テ(終)

マセン 3 カラ(接)・ゼ・カ

ヤセン 4 ガ(接)・ヨ・カ・ノ

セン 2 ゼ・カ

下接語の種類からみると、ナイ・ネエは下接語の種類が多く、ヌ・ン・マセヌ・マセン・ヤセン・センは種類がきわめて少ない。

3-5-2 待遇関係

待遇関係をみると、

上→下の関係 ナイ・ネエ・ヌ・ン

下→上の関係 ナイ・ネエ・マセヌ・マセン・ヤセン・セン

となり、ナイ・ネエは上→下にも下→上にも用いられ、待遇の範囲が広い。

3-5-3 話し手の位相

話し手の位相を比較すると、身分・職業・性別の明らかな話し手は、

士 ヌ・ン

工 ネエ

商 ナイ・ネエ・マセヌ

女 ナイ・ネエ・マセン

となり、〔士〕〔工〕〔商〕〔女〕に話し手の位相による使い分けが明らかである。そこで、終止形と連体形のナイ・ネエ系の使用者と、ヌ・ン・マセヌ・マセン・ヤセン・セン系の使用者とを、どちらか専用・共用の基準で分類すると、次のようになる。

〈男〉

- | | |
|------------------|--|
| (A) ヌ・ン専用者 | 〔士〕士・鄙武士〔他〕生文人・薮医
者 |
| (B) ナイ・マセヌ共用者 | 〔商〕町人 |
| (C) ネエとヌ・ンの敬体共用者 | 〔他〕芝居者・落語家・野幫間・西洋好
きの男 |
| (D) ヤセンの使用 | 〔他〕車夫 |
| (E) ネエ専用者 | 〔工〕職人〔商〕商法個・唐物屋の番頭
〔他〕あくぬけした男・新聞好きの男・
文盲の男・なまけものの男・牛・馬 |

〈女〉

第 10 表

性別	身分・職業 話し手	活用形	連用		終止				連体				假定										
			ナ ズ	ナ カ ツ	ナ ク ン	マ ヌ	マ セ ヌ	ヤ セ ン	セ ン	ナ イ	ネ エ	マ ヌ	マ セ ヌ	ヤ セ ン	セ ン	ナ イ	ネ エ	ナ ケ レ					
男	(A)	士	3	1	1						2							1					
		鄙武士									2												
		生文人 藪医者				1	3				1	1						1	1				
	(B)	町人	2			5									1								
	(C)	芝居者	1				2	3	1	1		1	2		1								
		落語家						4					2		6								
		野帮間					1	1	1	1			1		1								
	(D)	西洋好きの男 車夫	1					2	1	1			1		3								
	(E)	職人									1								1				
		商法個									5								10				
唐物屋の番頭																		1					
あくぬけした男		1								4								1					
新聞好きの男										3								2					
文盲の男		1	1							2													
なまけものの男 牛 馬										5								1					
(F)	娼妓		1							8				1									
	新造									1				1									
	歌妓	2								6				4									
	茶店女(ころ)	1	1							3				5									
	(G)	それしやあがり(ひき)	1	1						4	2			2									
(H)	牛店の女中					1																	
計			12	5	2	1	2	8	5	4	10	3	22	27	3	3	1	4	4	14	30	3	2

(F) ナイ専用者	娼妓・新造・歌妓・茶店女（ころ）
(G) ナイ・ネエ専用者	それしやあがり（ひき）
(H) マセンの使用者	牛店の女中

それぞれにグループ化された話し手は、(A)ヌ・ン使用の士族と知識人のグループ、(E)ネエ使用の〔工〕〔商〕に代表されるグループ、(F)ナイ使用の女のグループなど、身分・職業・性別のちがいを反映している。そして、これが『安愚楽鍋』にみられる明治初期東京語の動作の否定表現体系である。これを表示すると第10表ようになる。そして、このような身分・職業・性別と否定語との対応が、封建的社会制度と密接にかかわっており、そこに、この動作の否定表現体系の存在理由とその必然性があらわれている。

4. まとめ

明治初期東京語の否定表現体系は、以上考察してきたように、形容詞によって否定される「存在・指定・状態」の否定表現体系と、助動詞によって否定される「動作」の否定表現体系には、大きな違いのあることが明らかになった。

(1) 存在・指定・状態の否定は、ナイ系とネエ系によって行われ、(A)ナイ専用、(B)ナイ・ネエ共用、(C)ネエ専用の三つのグループがあり、話し手の身分・職業・性別のちがいを反映している。第3表参照。

(2) 動作の否定は、ナイ・ネエ・ヌ・ン・マセヌ・マセン・ヤセン・センによって行われ、男は(A)ヌ・ン専用と、(B)(C)(D)のヌ・ンの敬体とナイあるいはネエを用いるグループと、(E)ネエ専用に大別され、女は、(F)ナイ専用と、(G)ナイ・ネエ共用、(H)マセン使用に分けられる。そして、身分・職業・性別のちがいを反映している。第6、9、10表参照。

(3) 存在・指定・状態の否定は、ナイが士族階級に用いられたが、動作の否定は、ヌ・ンが士族に用いられた。ナイは形容詞と助動詞とで、語形は同じであるが、その使用者層に大きなへだたりがあった。

(4) 以上から、形容詞のナイ・ネエと、助動詞のナイ・ネエ・ヌ・ン・マセヌ・マセン・ヤセン・センなどの否定語は、身分・職業・性別と密接にむすびついており、どの否定語を用いるかによって、その話し手の身分・職業・性別を判

別することができる。これは福沢諭吉が「旧藩情」において指摘した中津藩の身分によることばの違いと合致する。

(5) このような身分・職業・性別による使い分けは、封建制を維持し、相手の身分を知るために、必要欠くべからざるものの一つであったと考えられる。そして、その中でも、士族とその他との間の区別が明確に行われていたようである(注8)。

明治初期は江戸末期の表現体系をうけついでいた時期で、しだいに今日の表現体系へと再構成される。その過程が東京語の成立過程であり、今後の課題である。

(注1) この用例は娼妓の引用で、客の身分が明確でないので、3-2-1以下の分析では除いた。

(注2) 「やうに」は助動詞とせず、「やう」を名詞に扱った。

(注3) 「ナイデ」は、「デ」を連体形接続の接続助詞として扱った。岩淵悦太郎ほか編『岩波国語辞典 第二版』参照。

(注4) この用例は引用で、話し手のことばのままかどうか明確でないので、3-2-1以下の分析から除いた。

(注5) この用例は、扇めん亭の善公と広小路の一庭が使者に来たときの口上の引用。

(注6) 三田村篤魚著『江戸っ子』(15べ)によると、江戸の市街地では、どの町でもそこに住んでいる人を分けると、地主(家持町人)、地借、店借があり、店借には表店と裏店とがあったという。ここの町人は、地主に属しているのではないかと思われる。

(注7) 「やうじや」は、「やう」を名詞に扱った。(注2)参照。

(注8) 身分・職業・性別によることばの使い分けは、指定表現体系や、人称代名詞にもみられる。

飛田良文「明治初期東京語の指定表現体系」(『方言研究の問題点』所収・昭和45年刊・明治書院)参照。

飛田良文「明治初期作品の敬語」(『敬語講座9 明治大正時代の敬語』所収・昭和49年刊・明治書院)参照。

鈴木英夫「『安愚楽鍋』の語法」(共立女子大学短期大学部文科紀要第17号・昭和48年)